ＤＯＴＳにおけるＡ病院との連携の取り組み

―すべての結核患者の治療完遂を目指して―

北部保健福祉事務所　疾病対策班　○技師　野村笑佳

Key words:治療完遂，DOTS，医療との連携

Ⅰ　はじめに

結核を完治するためには，入院または外来受診を続けながら抗結核薬を毎日規則正しく確実に飲み続ける必要がある。しかし，抗結核薬による治療は，通常６～９か月と長期にわたるため，飲み忘れたり，症状が軽快したことで自己中断したりする場合があり，治療を完遂するのは至難の技である。不規則な内服は，再発や薬剤耐性結核を招き治療が困難な事態に陥るだけでなく，薬剤耐性結核の蔓延は公衆衛生の観点からも非常に重要な問題であるため，保健所保健師は，すべての結核患者が治療完遂できるよう家庭訪問等による支援（DOTS；直接服薬確認療法）を行っている。

DOTS に基づく服薬支援を確実に行うためには，病院と保健所の連携がとれていることが重要であると言われているが [1)]，管内では医療機関との明確な連携体制は構築されておらず，事例を通してその必要性が明らかになってきたところであった。今回，Ａ病院との連携を開始したことで，患者支援に変化が見られ，患者の安定した療養生活と治療完遂の一助となり，さらなる患者支援の質の向上を目指した課題が明らかになったので報告する。

Ⅱ　活動内容

１　Ａ病院結核研修会「DOTS とは～地域内連携で患者を支える～」H26.5.28

連携の第一歩として，病院主催の研修会が開催され，当所は，「DOTS とは～地域内連携で患者を支える～」というテーマでの講話を担当した。講話終了後の意見交換では，「お互いの患者に対する関わりを理解できていない部分がある」「病院と保健所が日常的に相談し合える関係になっていない」という課題が明らかになった。

２　DOTS カンファレンス（H26.12.15，H27.3.13，H27.7.3，H27.12.10）

年２回の定期的な DOTS カンファレンスを行い，患者の治療完遂を目指して個別事例の検討を行った。検討を通して，お互いの役割や実際の関わり，患者のとらえ方を理解し合うことができ，また，定期開催することは顔の見える関係を築くことに繋がり，日常的に相談し合えるようになった。これからの課題としては，カンファレンスの対象となる患者数の増加（H26.12 の２名から H27.12 には１９名に増加）と関わりの難しい患者の増加に対応するための連携強化が挙げられている。

Ⅲ　考察

連携の第一歩として，研修会の中で意見交換を行ったことで，連携はお互いの役割や関わりを理解するところから始まることや顔の見える関係が大切であることを共に確認することができた。このことは，その後の定期的な DOTS カンファレンスの開催や日常の連携に繋がったと思われる。

定期的な DOTS カンファレンスでは，患者情報の整理と課題，支援方針の検討・共有を行ったことで，一人ひとりの患者に対して，すべての支援者が共通認識のもとで患者との関わりを持ち，きめ細かな支援を行うことができた。病院と保健所が連携して，一人ひとりの患者を支援することは，患者が支援者を信頼して安定した療養生活を送ることに繋がり，治療完遂の一助となったと考える。

課題として挙げられている「患者数の増加」と「複雑な背景を持つ患者の増加」に対応していくためには，カンファレンスの開催頻度や内容の見直し，定期的な勉強会の開催，これまでの結核患者との関わりを振り返る機会（コホート検討会）の設定等，さらに連携を強化していく必要があると考える。

Ⅳ　結論

結核患者の服薬支援における病院と保健所の連携は，患者支援の質の向上につながり，患者の安定した療養生活と治療完遂の一助となる。さらに，公衆衛生上の観点からも薬剤耐性結核の蔓延を防止する重要な活動である。

課題として，Ａ病院を受診する結核患者の増加と複雑な背景を持つ事例の増加があるため，さらに連携を強化して患者支援の質の向上を図り，すべての結核患者の治療完遂を目指して活動していく必要がある。

Ⅴ　引用・参考文献

１）公益財団法人結核予防会（2014）『感染症法における結核対策平成 26 年改訂版―保健所・医療機関等における対策実施の手引き―』